

紙漉の村にて

水尾 比呂志

其作るわざは彼に習ふといへどもこ
の國にて作れるは又此國の風そなは
りてうるはしくみづ／＼しき紙墨も
作り出るなりけり―天朝墨談卷四

かみ
佳味
加美
可見
紙

紙は雪國の窓の風を和らげ
紙は墨痕鮮やかに知己を訪ねる
紙は凜と音立てて雨を弾き
紙は艶然 春信美人の朱唇を吸ふ

紙

自然と人の手のたくみの花
はりはりと鳴る
ひとひらの造化の詩よ
陽にかざせば面にうすらけき紋の立ち
美しい轉生の物語が浮かび出る

その前生は山あひの一本の楮の木
生涯の短かさ忽ちに過ぎて
白皮となりそれはひとたび死んだ
表皮にまつはる思想を捨て
我意を捨て
生身を寒流に晒すのは後生への潔齋
また 灰汁の熱湯にゆあみして
木槌に打たれる一夜も生れ變りの秘儀なのだ
ほたほたと響く魂乞ひの音が
冥界の楮の霊を呼び返す

昆々たる生死をさまよひながら
紙素に變りゆく楮の思ひ出は
おそらくかすかな山の風
鳥の歌

あるひは幹に戀を彫りつけた若者の
白い息づかひ
皮を洗ふ娘が手をとめて
みるみる染めた紅い頬の色
だがそれも速やかにしんしんと冷い水に融け
紙素の記憶は漉船のなかで薄れてゆく
雪は降り
降り
降りつもり窓のうちの

―わしが紙漉きや紙屋の向ふへ
雪の降るやうにちらちらと―美濃紙漉唄

漉簀は紙素の睡りを漉く
白くゆたかな娘の腕に揺られ
揺られてもまだその睡りは重い
深い睡りだけを娘は漉き 漉き重ね
おぼろな夢の餘の水は捨て去る
無垢の眼ざめを迎へるために
湿紙は重しの下に夜を過ごし
なほ残る過去を滲み出しつくすのだ

晴天の朝
いっせいに咲き香る白く白い真冬の花
紙漉の村は
干板で綴られた新生の讃歌
そして

紙は解脱した清冽さでぱつちりと眼を開く
―唐の紙は脆くて朝夕の御手馴らしにも如
何とて紙屋の人を召して殊に仰言賜ひて
心殊に清らかに漉かせ給ふ―源氏物語鈴蟲

沈黙して古人の行状を秘める古書の紙
王朝を透かすやはやは紙
金判太々と奉書紙
風情の強い紙衣紙かみこ
祭を運ぶ提灯紙
市松模様の襖紙
紙の王 雁皮
雄々しき楮紙
織麗なる三極よ
いづれとて人間への
造化の神の贈りもの

そのひとひらをそつと陳べて
ひと文字づつ
ひと文字づつ
私は
愛しみを
悲しみの心をしるす
これは
滅びてゆく自然と人の手の
たくみに捧げる
紙の詩

「權」十三号 權の会 一九六六年六月十日発行より

※令和六年度 川崎市市民ミュージアム企画展「紙すくひと」出品資料
令和六年十二月十三日(金) ～令和七年三月三十一日(月)